般若経における菩薩地と菩薩位

小 沢 憲 珠

一

大品系の般若経には「過_二声聞辟支仏地、入_二菩薩位」という定型文が多い。菩薩地は菩薩にとつての修行の地であるが、この定型文では「菩薩地」ではなく「菩薩位」の語が用いられている。声聞辟支仏の二地の対応語としても、ここでは菩薩位であり、そこに特別な意味があることをうかがわせる。菩薩位は大品系が新しく導入した概念とみられるが、菩薩地と菩薩位との関係をここでは明らかにし、ひいては菩薩の行位体系解明の一助としたい。

先ず小品系般若経において、菩薩位と菩薩地との言葉の所在をみておきたい。先ず「菩薩位 bodhisattva-nyāma」であるが、菩薩位の内容が何を意味するかは後述することにして、この語は大品系にはさかんに出てくるのであるが、小品系にはほとんどみられない。ただ羅什訳の『小品般若』深功德品に、

菩薩行_二般若波羅蜜_一能過_二声聞辟支仏地、入_二菩薩位、得_二阿耨多羅三藐三菩提_一（大正八・五六六b）

という文がある。ここに一度だけ「入菩薩位」と出るが、この文は『八千頌』にもなく、羅什訳以外の漢訳諸本にもないことから、菩薩位の語は、大品系になって一般化したものとみられる。

次に「菩薩地 bodhisattva-bhūmi」であるが、これは『小品般若』初品に、

若善男子善女人、欲_レ学_二声聞地_一、当_レ聞_二是般若波羅蜜_一受持読誦如説修行、欲_レ学_二辟支仏地_一、当_レ聞_二是般若波羅蜜_一受持読誦如説修行、欲_レ学_二菩薩地_一、当_レ聞_二是般若波羅蜜_一受持読誦如説修行、（大正八・五三七b、w本四三頁）

とあり、ここに声聞地、辟支仏地に対応する語として菩薩地がみられる。しかしこの語も『小品般若』ではこの箇所だけである。ただし「不退転の菩薩地」という語は何度か出てくる。これは塔品（大正八・五四二c、w本二四頁）と阿惟越致

相品(大正八・五六五b、w本六九〇頁)に、それぞれ「阿毘跋致地」「阿惟越致地」の語がみられ、いずれも「avinivarta-niyāyam bhodhisatva-bhūmau」という原語である。

このように『小品般若』では、菩薩地の思想はもっているようであるが、基本的には、声聞地、辟支仏地に対応するのは、仏地(buddha-bhūmi)である。これは阿惟越致相品の凡夫地、声聞地、辟支仏地、如来地の四地説(大正八・五六四a、w本六六六頁)に代表されるであろう。あるいはまたこの仏地に相当するものとしては、阿耨多羅三藐三菩提である。無慳煩惱品の「遠_レ離声聞辟支仏地、近_レ阿耨多羅三藐三菩提」(大正八・五七四c、w本八二七頁)、見阿闍伽品の「不_レ墮_三声聞辟支仏地、疾近_三薩婆若」、必得_三阿耨多羅三藐三菩提」(大正八・五七八c、w本八八一頁)例等のは、『小品般若』中には数多くみられる。つまり声聞地、辟支仏地の対応語は、仏地(如来地)であり、また阿耨多羅三藐三菩提であって、菩薩地の語は使われていない点にある。このような基本的な態度は、小品系にも踏襲されてゆくが、小品系では、声聞地、辟支仏地の対応語としての菩薩位が、仏地に至る菩薩の行位上の問題としてクローズアップされてくるのである。

二

そこで小品系ではどうか。小品系の般若経では、

般若経における菩薩地と菩薩位(小 沢)

周知のように乾慧地にはじまる十地の思想が説かれている。これは乾慧地、性地、八人地、見地、薄地、離欲地、已作地、辟支仏地、菩薩地、仏地の十であるが、この中の第九に菩薩地(bodhisatva-bhūmi)が位置している。しかしこの菩薩地の語も、小品系においても意外に使用例が少ないことに注目される。大概においては、乾慧等の十地の名称を列挙するときのみ菩薩地の語が用いられているようである。この外の使用例をみてみると、一つは先述の『小品般若』初品の『小品般若』相当箇所(大正八・二三四a、D本一二三頁)であり、一つは問住品の「過_三声聞辟支仏地、我当_レ住_三菩薩地、不_レ応_レ住」(大正八・二七五a、正大紀要五六・一五四頁)の文である。ここに十地の中以外で、菩薩地の語が使われているが、これは極めてめずらしい使用例である。三乗という面から「地」に即してみるならば、声聞地、辟支仏地、仏地であるが、小品系ではこの仏地から菩薩地を独立させたともみられる。しかし、実際には菩薩地は限られた範囲内で使われる語のようである。

それでは十地以外の箇所、菩薩地に代るものは何かである。『小品般若』では、それが「菩薩位 bodhisatva-niyāma」であり、ときとして「阿惟越致地 avinivartaniya-bhūmi」である。とくに声聞地、辟支仏地の対応語としては、菩薩地よりも菩薩位がより重要な意味をもってくることに注目され

る。また小品系では、菩薩地の内容に目が向けられていったことを物語っている。

『小品般若』における菩薩位の初出箇所は、序品の、復次舍利弗、菩薩摩訶薩欲^レ上菩薩位(śodhiṣṭva-nyaman avakramitu-kāmena) 当^レ学^三般若波羅蜜(欲^レ過^三声聞辟支仏地、住^レ阿惟越致地、当^レ学^三般若波羅蜜(大正八・二一九a、D本二一頁)

に求められる。ここは『小品般若』が菩薩の行位面に最初にふれる箇所であり、菩薩にとって菩薩位と阿惟越致地とが重要な意味をもっていることを示唆している。しかし経典全体からみた場合は、とくに声聞地、辟支仏地に対応する語としては、阿惟越致地よりも菩薩位の方がより多く使用されていることに気がかされる。

その一例を深奥品の文によって示しておきたい。

菩薩摩訶薩行^三般若波羅蜜、過^三一切声聞辟支仏地、入^三菩薩位、漸漸得^三阿耨多羅三藐三菩提(大正八・三四四c)

ここにその典型例をみることができるが、つまり「声聞辟支仏地を過ぎて(ati-kram)」、菩薩位に入る(ava-kram)」という一つの定型文である。『小品般若』ではこのような定型文において、菩薩位の語が数多く使用されているという事実である。これは菩薩位として「入菩薩位」が、声聞地、辟支仏地と阿耨多羅三藐三菩提との中間に位置する行位上の重要な

通過点であることを意味している。また法称品の「声聞人学^三般若波羅蜜、得^三阿羅漢道、求^三辟支仏道」人、学^三般若波羅蜜、得^三辟支仏道、菩薩学^三是般若波羅蜜、得^レ入^三菩薩位(大正八・二九三b、正大紀要六四・四三九頁)によれば、声聞の人が阿羅漢道(arahatta)を得、辟支仏の人が辟支仏道(ṅra-tyekabodhi)を得るのと同等に位置づけられているのが、菩薩位としての「入菩薩位」である。

さらに『小品般若』遍学品の次の記述をあげておきたい。若菩薩摩訶薩從^三初發意、行^三六波羅蜜時、以^レ智觀已、過^三八地、何等八地、乾慧地、性地、八人地、見地、薄地、離欲地、已弁地、辟支仏地、直過^三以^三道種智、入^三菩薩位(大正八・三八一a)

乾慧地等の十地の中、初乾慧地から第八辟支仏地までを、菩薩は道種智によって超過して、菩薩位に入るとされる。初乾慧地から第八辟支仏地までは実質上は声聞辟支仏地を内容としているが、十地の順からみれば、当然菩薩は次の第九の菩薩地に入ると説かれるべきである。しかし実際には「入菩薩位」となっている。このことは「入菩薩位」の方が、「入菩薩地」に比べて、より重い意味をもっていることを物語るものである。また同時に第九菩薩地の内容が問われていることにもなる。

そこで次には菩薩位の語のもつ意味を明確化しなければならぬであろうし、また菩薩の行位上、「入菩薩位」とは何かが問われねばならない。bodhisattva-niyāma の niyāma は、niyāma という動詞の派生語であり、「決定」の意味をもっている。有部アビダルマでも、この語には通常「正性離生」の訳語が当てられているが、声聞でいえば見道位である。bodhisattva-niyāma に対しては、玄奘訳の『大般若』は「菩薩正性離生」を、竺法護訳『光讚般若』は「寂然」を、無羅

又訳『放光般若』は「菩薩位」の訳語をそれぞれ当てている。語意からは、正しく菩薩として決定する位という意味になる。これはまた般若経の立場からすれば、声聞地、辟支仏地とは決定的に異なる菩薩の位でなければならぬことになる。

このような意味をもつ菩薩位は、それでは菩薩の行位上どのような具体的な内容をもちあわせているかである。これについて第一に指摘できるのは、菩薩位に入った菩薩は、無生法忍との関係で説かれていることである。遍学品は先述のように、八地を過ぎて菩薩位に入ると説くが、つづいて「是八人若智若断是菩薩無生法忍……辟支仏若智若断皆是菩薩無生法忍、菩薩学_二如_レ是声聞辟支仏道、以_三道種智、入_二菩薩位_一」（大正八・三八一a）と説いている。同じく遍学品に「若不_レ過_二声聞辟支仏地、不_レ能_レ入_二菩薩位、若不_レ入_二菩薩位、不_レ得_二無生法忍_一」（大正八・三八二c）、六喻品に「入_二菩薩位_一」

般若経における菩薩地と菩薩位（小 沢）

已、得_二無生法忍_一」（大正八・三九〇b）という。いずれも入菩薩位と得無生法忍との関係がそこにみられるが、行位の上から、どちらが先かとなると、入菩薩位ののちに無生法忍を得るのである。換言すれば、無生法忍を得るための条件が、入菩薩位である。また無生法忍は不退転の菩薩のもつ特性でもあるから、菩薩位と不退転との関係も改めて検討する必要があろう。

無生法忍については『小品般若』にすでに説かれている。当然ながら『小品般若』では菩薩位との関係は説いていない。だが『小品般若』深心求菩提品では「……是名_二諸仏無生法忍、菩薩能成_三就如_レ是忍者、当_レ得_レ受_三阿耨多羅三藐三菩提記_一」（大正八・五七二c、w本七九九頁）といい、無生法忍を得た菩薩は、授記をうけるとされている。『大品般若』では夢誓品（大正八・三五五b）に相当箇所があり、『大品般若』にたしかえるならば、授記をうける条件としての無生法忍、さらに無生法忍を得る条件としての菩薩位が考慮される。

行位上の菩薩位について第二に指摘できるのは、空観との関係である。『大品般若』勸学品はこれを十八空との関係で説く。

舍利弗問_二須菩提_一、云何名_二菩薩摩訶薩無生_一、須菩提言、菩薩摩訶薩行_二般若波羅蜜_一時、内空中不_レ見_二外空_一……無法有法空中不_レ見_二有法空_一、舍利弗、菩薩摩訶薩行_二般若波羅蜜_一、得_レ入_二菩薩位_一、

（大正八・三三三b、D本二一〇—頁）

ここに舍利弗が「菩薩摩訶薩の無生とは」と質問しているが、この「無生」とは「nyāma」であり、nyāmaと同義語である。したがってこれは菩薩位とは何かという質問に外ならない。『小品般若』ではまた、十八空は空の異名である。また空三昧の内容も十八空の裏づけをもって説かれている。勸学品はこのような十八空による空觀の実践によって、菩薩位に入ることが説かれている。また六喻品では「菩薩善学_三内空_二、善学_二外空_一、乃至善学_二無法有法空_一、於_三是諸空_二、無_三法可_レ住_二处_一、……菩薩摩訶薩行_三如_レ是諸空_二、能入_三菩薩位中_一」（大正八・三九一b）とあり、やはり十八空という空を行ずることが、菩薩位に入る条件として説かれる。

『小品般若』が、声聞辟支仏地を超えて菩薩位に入るとしきりに説くのは、菩薩地よりもその内容である菩薩位をより重視するからに外ならない。しかもその場合の菩薩位は、行位の進展上、声聞地、辟支仏地とは決定的に異なる要素が備わった位だからである。その決定的に異なる要素は何かといえば、ここにいう十八空という空觀が備わることである。『小品般若』でも、空三昧に住することは声聞辟支仏地との決定的な決別の意味をもたせている。『小品般若』では、そこに菩薩位という新たな概念を導入し、声聞辟支仏地とは異なる行位上の新たな位としたのである。

さらに第三に、菩薩位が菩薩の見道と目されていることである。遍学品は次のようにいう。

譬如_三八人_一、先学_三諸道_二、然後入_三正位_一、未得_レ果而先生_二果道_一、菩薩亦如_レ是、先遍学_三諸道_二、然後入_三菩薩位_一、亦未_レ得_二一切種智_一而先生_三金剛三昧_一、（大正八・三八一a）

ここに声聞と菩薩との比較がみられる。八人（asāṃhata-bhūta）とは、乾慧等の十地でいえば第三の八人地である。

この八人地は声聞の須陀洹向、つまり見道である。ここでは正位という語によって表わされている。菩薩の場合も同様に、菩薩位とは声聞でいう八人地、つまり菩薩の見道に相当するといのである。第三の八人地が菩薩位なのではない。菩薩は先述のように、初乾慧地から第八辟支仏地までの八地を、道種智によって菩薩位に入るといっているのであるから、この菩薩位は第九の菩薩地における菩薩位であり、見道である。

四

『小品般若』における菩薩位について、以上の三点から行位上にもつ意味をみたのであるが、菩薩位と菩薩地との関係についてさらにふれておきたい。乾慧等の十地説には、確かにその第九に菩薩地が位置するが、実体のない菩薩地といわねばならない。この十地は、凡夫地（乾慧地、性地）、声聞地（八人地、見地、薄地、離欲地、已作地）、辟支仏地、菩薩地、

仏地の五地から構成されている。この中の声聞地は、須陀洹向、須陀洹果、斯陀含、阿那含、阿羅漢という次第をおった内容をもっている。しかし菩薩地には内容の具体性がなく、名称のみがあるのである。經典では菩薩はこの十地を具足すると説くのであるが、乾慧等の十地の実質的な内容は、声聞が阿羅漢果を得るまでの声聞地であり、菩薩の十地とはいえない十地である。この十地において菩薩は、凡夫地、声聞地、辟支仏地を、すなわち初乾慧地ないし第八辟支仏地を、道種智によって、無生の法 (anupatika-dharma) であると忍可する (śanti) のである。つまり前八地は無生法忍によって超過する (ati-kram) 地である。菩薩は次第をおって、須陀洹、斯陀含等の証果を得てゆくのではない。したがって菩薩地としては、第九の菩薩地こそが菩薩道の根幹となるべき地である。にもかかわらずこの菩薩地には実体がともなわないのである。形式だけが整っているといえよう。般若経が菩薩地の語をあまり使用しない理由も、このような状況からうかがえる。

筆者はかつて、第九菩薩地の中に、菩薩の初発心位があり、ないし不退転位があると予測した。⁽³⁾ 菩薩地の中にひろがりをもたせ、菩薩の行位の進展をみようとするのである。『大智度論』も実はこれに似た解釈をほどこしている (大正二五・五六 a b)。『大品般若』自身は表立ってこのような

般若経における菩薩地と菩薩位 (小沢)

説をのべてはいないが、十分にその意図はくみとれると考えられる。この考えに立つと、乾慧等の十地では、菩薩の初発心位は第九地にあるから、菩薩は第九地からスタートするという極めて変則的な十地説となる。もともと乾慧等の十地説は、菩薩にとつては無理のある十地であるが、三乗を説く『大品般若』の立場からは、乾慧等の十地を説く必要があったとみるべきであろう。ただし『大品般若』はこの外にも十地を説くのであって、それは菩薩地のみを内容とする十地であるが、これについては稿を改めねばならない。

般若経は声聞辟支仏に相應する精神を極度に否定するが、これは行位の上でも菩薩につねに課せられる課題である。般若経が声聞地、辟支仏地の対応語として、菩薩地ではなく菩薩位を用いるのは、菩薩地の内容を問うからである。菩薩地という場合は、おそらく初発心もしくは新学の菩薩も含んでいる。行位の進展上、声聞辟支仏に不共のものが備わって、はじめに般若経が目指す菩薩たりえるからである。そこに菩薩地における菩薩位の重要性をみるのである。

1 拙論「大品般若経における菩薩の三昧」(『竹中博士頌寿記念、宗教文化の諸相』)

2 拙論「菩薩と声聞辟支仏地」(『壬生博士頌寿記念、仏教の歴史と思想』)

(大正大学講師)